岡部耕大は青春時代を佐賀県伊万里市で過ごしました。長崎県松浦市から佐賀県立伊万里高校への汽車通学でした。「あの三年間が生涯を決めた」と語る伊万里の青春時代は、まだ東京オリンピック前の素朴で人間性が溢れている時代でした。

岡部耕大が伊万里が生んだ明治の英傑「森永太一郎」に取り組むこととなりました。武骨と素朴、純情と豪快、知性と腕力、志と意思の持続。森永太一郎は岡部耕大が好む日本人の典型の人です。そして、森永太一郎の過ごした故郷と青春は岡部耕大の故郷と青春に重なります。『天使が微笑んだ男ー森永太一郎伝ー』は、岡部耕大がライフワークとして取材に取材を重ね、すでに遠くに忘れ去られた日本人の心根を描きます。

そして、今日の「日本の荒廃と日本人の寂寥感」の原因を鋭く追及します。それも、堅苦しい立志伝ではなく、伊万里の人に教訓を受け、横浜から渡海した森永太一郎の洒落た先駆者の精神をミュージカル仕立てで構成致します。森永太一郎は、伊万里が生んだ明治の英傑というだけではなく、いま日本人が喪失してしまった「決して諦めない」男森永太一郎として快活に描き、その太一郎を取り巻く「純朴でありながら、火のような魂を持つ女」たち、太一郎の終生の教訓を教える信仰深い祖母のチカや、太一郎に寄り添い辛苦を共にしながら決して弱音を吐かない妻のセキの生命力を笑いとペーソスに包みながら描き「人間、諦めずに生きれば天使は微笑むものである」ことを訴えるものです。

「人間は挫折する。しかし、諦めるな。」

『天使が微笑んだ男ー森永太一郎伝ー』は、人間ひとりひとりの生命の尊さを訴える作品です。
これは、生命を粗末にする風潮にある現代の日本の若者に一人でも多く観て貰い、「人間ひとりひとりの生命の尊さ」を知って貰いたい作品です。

森永太一郎は鉄のごとき意思を持って貧困に耐え、誠実と信仰を支えにして孤独の詩を未来への限りなき希望として、波瀾万丈の生涯を生きた男である

森永太一郎は慶応元年、佐賀県伊万里の陶器問屋に生まれた。6歳にして父を亡くし母は再婚した。太一郎は孤独同然の身となり親族の間を転々として露命をつなぐようになった。この可憐な孤児の太一郎を可愛がり庇ってくれたのが信仰深い祖母のチカであった。伊万里の秋祭りは「トンテントン」である。一人で遊んでいた太一郎は一銭銅貨を拾った。祖母のチカが晴れ着に着替えさせようとすると、一銭銅貨が畳に転がり落ちた。「こいは、どげんしたと」。祖母のチカは厳しく問い詰めた。「拾ったと」「拾ったとば、黙って懐に入れたとね」。太一郎は沈黙した。「ばってん、お金の欲しかったとたい」。祖母のチカは太一郎の心に刻み込むように言って聞かせる。「人のものを取ってはいかん。拾うても人のものは人のものたい」。太一郎の心に祖母チカの言葉が沁みる。「拾ったり盗んだりしたお金は悪いお金です。悪銭身に付かずと昔からいいます。正しいお金というのは自分で汗を流して働いて得たお金だけです。お金が欲しいのは人間として当たり前です。お金が欲しい、お金が欲しいと思い続けてよろしい。その代わり、自分の力で働いてお金を沢山貯めるようにするんですよ」。幼い日の祖母チカの言葉は森永太一郎の終生の教訓となった。

11歳の太一郎は伊万里啓蒙社に弟子入りし漢学を学ぶ。太一郎は漢文で書かれた頼山陽の著書「日本外史」全22巻を読破し、師匠の川久保予章に代わって講義をするまでになっていた。そして、13歳の太一郎は陶器商である伯父の山崎文左衛門の元に引き取られる。文左衛門の商売は伊万里焼を近在の陶器工場から仕入れて、東京や大阪へ送り、東京からは織物や蝙蝠傘や袋物を仕入れて肥前各方面の店へ卸すのが仕事であった。或る日、この伯父が太一郎に難問を吹っ掛けた。「おいも12の春から見習奉公ばしたとたい。そのとき一文、二文ずつ貰った金ば蓄えて13歳の春までに、ようやく2分にしたとたい。この2分を資本として、1分で天秤棒と笊ば買うて、残りの1分でガサという焼け損じの陶器ば買い入れて、行商ば始めたとが今日の元になったとたい」。伯父文左衛門は「真の商売人となるには、まず第一に金の大切なことを心から知らねばならぬ」と太一郎を諭した。そして、「そこで、お前にも最初の資本として50銭だけ与えるから、なんなりと商売をしてみろ」といった。太一郎は、この50銭を資本にして、コンニャクと野菜物の行商を始めた。「山崎の大家の甥が行商ばしよる」と近在の噂になったが太一郎は頓着しなかった。利益は少しずつ増して、五円になり、十円になり、二十円になった。太一郎は鬼の首でも取ったように嬉しかった。この行商が太一郎を商人として世に立つことの興味を覚えさせた。伯父文左衛門は、太一郎に商売上の教訓を与えた。それは、太一郎の終生の指針となる貴重なものであった。「いかなる場合においても正当な品のみを扱い、決して不正直な物を売買してはならぬ。もし目前の欲に迷い、不堅実な品を扱うことがあったら、決して真の商売人になることはできない」。「適当な値と信じて、その売価を発表したならば顧客に左右せられても、その値を絶対に引いてはならぬ。もし、値を負けるような意思の薄弱なことでは商売人としての成功は不能である」。「急がずに10年を一期と定めて商売をせよ。商売というものは、絶えず損があり益があるものであるから、眼前の損益に囚われると自然に迷いが生じる。遠大に構えてその業を終生守ることはできなくなる」。幼い日の言葉は身に染みて消え難いものである。

15歳の太一郎は伯父文左衛門の勧めで「堀七」という伊万里焼の問屋に奉公することになる。「堀七」の若主人は平気で客に不徳の行為をする人間であった。太一郎は小久保先生が貸してくれた「西国立志伝」に発奮していた。太一郎は東京に出て勉強しようと決心する。決心すると実現までやめないのが太一郎の性格である。太一郎は衣類を質に入れて上京した。

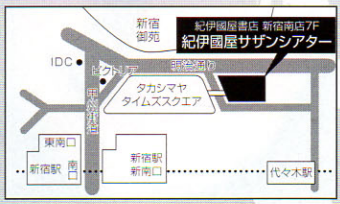
明治16年。19歳の太一郎は初志を貫いて、横浜の有田屋という陶器貿易商に勤めることになった。明治17年、太一郎は有田屋の主人の媒酌で小坂セキと結婚した。太一郎、20歳の春であった。

明治21年。いまだ欧米の知識の輸入されない「日本の夜明け」という時代に森永太一郎は単身渡米する。波瀾万丈、誠実と信仰によって森永太一郎は「天使（エンゼル）」を伴って日本へ凱旋する……

12月5日(水)▶11日(火)

新宿南口 紀伊國屋サザンシアター

タカシマヤ　タイムズスクエア　紀伊國屋書店新宿南口店7F　03(5361)3321



●料金〔全席指定〕

一般	5,000円
ペアチケット（要予約）	9,000円
高校生以下	3,000円

●問い合せ・前売り

前売開始／10月22日（月）
岡部企画　044-933-9754
チケットぴあ　03-5237-9988
キノチケット　新宿東口紀伊國屋書店5F

12月	5日(水)	6日(木)	7日(金)	8日(土)	9日(日)	10日(月)	11日(火)
14:00				●	●		
18:30	●	●	●			●	●